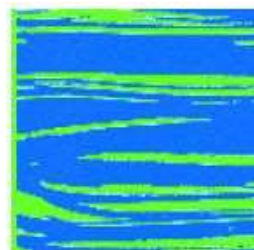


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2018年 夏号 No.91 (2018年07月27日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

<行動分析学会第36回年次大会関連記事> 京都拉麺案内.....福田 実奈
<春の学校:参加記> 外様として参加して.....松井 大
<ABAI/SQAB 体験記:参加記> 「はじめてのSQAB」.....折原 友尊
<自著を語る> 坂上貴之・井上雅彦著
「行動分析学 -- 行動の科学的理解をめざして」.....坂上 貴之
編集後記.....ニューズレター編集部

<行動分析学会第36回年次大会関連記事>

京都拉麺案内

福田 実奈

(同志社大学)

会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。皆様ご承知の通り、今年度の年次大会は同志社大学@今出川キャンパスにて行われます。京都の中心部での開催ということで、学会の前後に観光でも、と計画されている会員の皆様も多いのではないのでしょうか。そのようなニーズもあってか、本ニューズレターにて京都案内執筆のご依頼をいただいたので是非ともお受けしたのですが、いざ書こうとすると何を書こうか迷ってしまいます。寺社仏閣なら巷の観光ガイドの方が優れていますし何より学会そっちのけで観光されるのは困る、だとしたら何を書けば……そうだ！京

都にはラーメンがあるじゃないか！（※個人の感想です）ということで、僭越ながら学会会場周辺の京都のラーメン案内（略して京都案内）を執筆させていただきます。時間がタイトになりがちな学会期間中のお昼ご飯も、ラーメンなら安心です！

① 天下一品 今出川店

※日曜定休

個人的オススメ度 ★★★★★

京都のラーメンといえばこれ！チェーン店と侮るなかれ、ご注文の際はぜひ「こってり並ネギ多め」で！

② 中野屋にぼ次郎 今出川店

量 ★★★★★

「ジロウ」と聞いて、学生さんも大満足な量を提供してくれるラーメン二郎を思い浮かべる皆様もいらっしゃるかもしれませんが、こちらのお店は普通の量を注文すれば良心的な量が出てきます。もちろん量が増える呪文「増し増し」も詠唱可能です。

③ ラーメンこんじき 本店

バランス ★★★★★

入り口の白い大きな提灯が目印。京都の定番、烏白湯ラーメンが楽しめます。せっかくの学会、リッチな気分を味わいたい方はチャーシュー、海苔、煮卵「全のつけ」の特製ラーメンをどうぞ！

④ 麺イズム はらはち

※日曜定休

腹何分目？ ★★★★★★★★★★

唐揚げ無料・ごはん食べ放題という腹八分目じゃ済まない台湾まぜそばのお店。いつもは学生さんで賑わっていますが夏季休暇中はどうでしょうか。

⑤ 麺屋あくた川

※日曜定休

会場からの近さ ★★★★★

関西では珍しい「家系ラーメン」のお店。学会会場（良心館）の真向かいにありアクセス抜群です。ごはん 50 円お代わり自由なので学生の皆さんにオススメです！

⑥ 麺屋あかり

隠れ家度 ★★★★★

学会会場を出て烏丸通を横断し、上立売通に入って寒梅館を左手に見ながら徒歩3分、地下にあるお店です。落ち着いた雰囲気店内で、京都の定番である烏白湯ラーメンがいただけます。

⑦ 是空

唐揚げオススメ度 ★★★★★

一乗寺の有名店「高安」の姉妹店。学会会場から徒歩15分ですが、1個2個というよりは1枚2枚と表現の方が相応しい巨大な唐揚げをぜひご堪能ください！

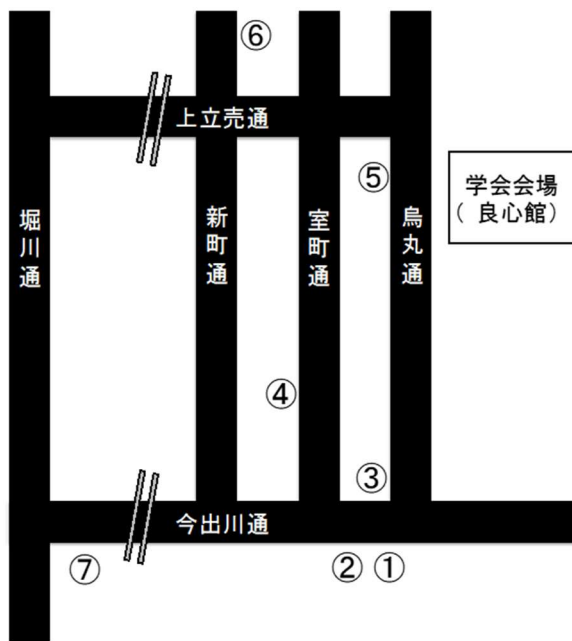


Figure 1. 日本行動分析学会第36回年次大会会場周辺地図（地図内の番号は記事中で紹介したラーメン店の位置）

京都拉麺案内、いかがだったでしょうか？ささやかながら、真面目な（これまでも大真面目だったのですが）京都案内もしておきますと、今回の会場である今出川キャンパスは薩摩藩邸跡に位置しております。その用地の譲渡にもドラマがあり、2013年大河ドラマの「八重の桜」でも事の顛末が描かれております。キャンパス内には重要文化財に指定されている建物も多数残っており、学内を散策していただくだけでもお楽しみいただけるのではないかと思います。それでは晩夏の京都にて、皆様のお越しを心よりお待ちしております。

<春の学校：参加記>

外様として参加して

松井 大

(慶應義塾大学)

この度は、慶應義塾大学日吉キャンパスにて開催された行動分析学春の学校に参加させていただきました。実を言うと、私自身は行動分析学徒でも、応用行動分析家でもなく、専門はカラスとハトを用いた神経行動学・比較認知科学です。今回は同大学の行動分析学研究室の後輩に誘われたところ、興味を惹かれ、参加しました。つまり、大学院生の一般参加という比較的レアなパターンになります。とはいえ、学部から大学院を通じて実験的行動分析学には触れる機会は多く、実験棟には常にオペラント箱を動かしている先輩・後輩がいる環境に身を置いています。なので、行動分析学は分野は違えど身近な存在……とっていました。

いざ、参加してみると、自分の眺めていた行動分析学がいかに狭い範囲のものであるかを知りました。私にとって春の学校の目玉は「徹底的行動主義を考えるワークショップ」でした。講義パートでは、ワトソンとスキナーがそれぞれ何を批判していたのかが、歴史と照らし合わせながら解説されていました。また、21世紀の現代に、スキナーを乗り越えようとする試みとして、新たな潮流があることも知りました。徹底的行動主義と、それ以前・以後で、行動、ないしは「心」の捉え方の深い部分で互いに相違があるというのが、私にとっては驚きでした。ディスカッションパートでは、講義パートを踏まえて行動主義について討議するものでした。その夜の交歓会では、基礎・応用の別なく輪になって語り合う様子が印象的でした。

2日目には、応用寄りの講義に参加しました。

私の所属する大学にも、応用行動分析学の研究室はあります。大学院生自体人数が少ないため、研究室が違っていても比較的会話は多い方かと思えます。しかし、私自身のより好みのせいとか、日常で同研究科の大学院生と交わす会話は実験の話ばかりでした。普段参加する学会が動物学・生物学系の学会であることも相まって、臨床の話はライブで（しかも真面目に！）聞くのは実に学部2年生以来でした。こういうふうには、門外漢がじっくり話を聴けるのは講義形式の良さですね。学会だとしても自分の専門に近いセッションばかりに居座ってしまうので。

以上の講義やディスカッションを経て、行動分析学、あるいは行動分析学会への見方が変わりました。合宿に来る前は、行動分析学会はかなり均質な集団であると、ある種の偏見がありました。いわば、みんながみんなスキナリアンであると思っていた節がありました（もしそうだったら、ちょっと怖いですね）。しかし、今回の合宿を通じて、それは誤解であって、良い意味で「一枚岩でなさ」を感じさせられました。合宿が終わった後には、歳の近い人たちで飲み会にいきました。これは顔をつき合わせて出会う集まりの醍醐味ですね。

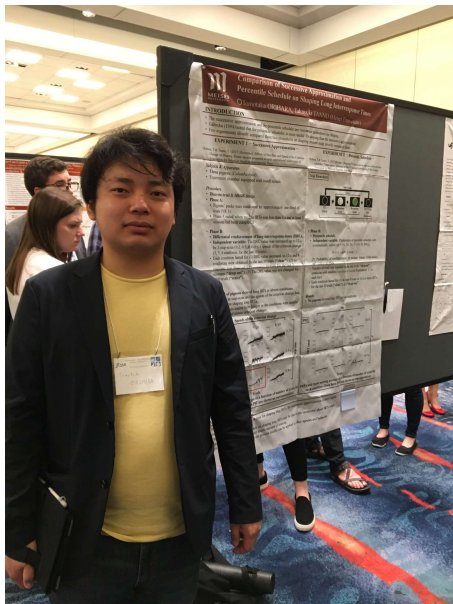
最後に、素敵な合宿を企画してくださった若手の会幹事の皆さま、熱い講義をしてくださった講師の皆さま、温かく交流してくださった他の参加者の皆さま全員にお礼を申し上げます。またどこかでお会いした際は、どうぞよろしくお願ひします。

<ABAI/SQAB体験記：参加記>

はじめてのSQAB

折原 友尊
(明星大学)

博士後期課程2年の折原友尊（オリハラトモタカ）です。この度、日本行動分析学会より「日本在住学生会員のABAI/SQABの参加に対する助成」を受け、サンディエゴで開催された第44回ABAI年次大会、そして第41回SQAB年次大会に参加し、SQABにてポスター発表を行ないました。開催地であるサンディエゴは、カリフォルニア州太平洋沿岸に位置し、温暖な気候として知られ、開催期間中はほぼ快晴で、湿度も低く、そして治安も良く、とても快適に過ごすことができました。



さて、私は今回はじめてSQABに参加してきました。知らない人もいるかもしれないので、少しSQABについてご紹介します。SQABとは、Society for Quantitative Analyses of Behavior（数量的行動分析学会）の略称であり、ABAI

よりも基礎研究がメインの学会であります。例年5月末の5日間にわたって開催されるABAIの初日からの2日間に、SQABは開催されます。午前中から夕方17時頃にかけて口頭発表が中心で行なわれ、19時から約3時間にわたってポスター発表が行なわれます。今回から新たに学生の口頭発表の時間が設けられていました。

私は“反応形成の数量的検討”をテーマに研究を行なっており、今回は「Comparison of successive approximation and percentile schedule on shaping long interresponse times」というタイトルでポスター発表を行ないました。発表には多くの方が来て下さり、中には説明後に、友人を連れて再度来て下さる方もいたりして、3時間ほどの在籍時間もあっという間に終わっていました。SQABは頭が切れ、鋭い指摘をしてくる（人によっては怖いと感じる）方々が渦巻く魔境と聞いていたので、発表前までとても不安でしたが、聞きに来られた方々は優しく、私の拙い英語を汲んで、わかりやすい英語で話してくれました。なので、皆さん！怖がらずにSQABでも発表しましょう！（今回の日本人発表者は私を含めて2, 3人でした。）また、シンポジウムでは、最新のトレンドや第一線で活躍されている方々の研究を間近で聞くこともでき、とても刺激的な2日間となりました。（国内外問わずですが、）学会が終わった後は、行く前よりも「もっと研究したい！」と元気になるのですが、こうした経験が、私にとって研究を行なう上での大事なモチベーションの1つに

なっているのだな、と改めて感じることができました。

最後に、改めて今回の参加にあたり、日本行動分析学会より「日本在住学生会員の ABAI/SQAB の参加に対する助成」を受けたこ

と、この場を借りて御礼申し上げます。そして、国際学会に行ってみたくも思っている皆さんも是非、こうしたチャンスを生かし、国際学会に参加してみよう！

<自著を語る>

坂上貴之・井上雅彦著

「行動分析学 -- 行動の科学的理解をめざして」

坂上 貴之

(慶應義塾大学)

ストライキの終わった1973年6月、大学2年の原典講読の教科書が自分にとって最初の行動分析学の教科書であった。のちに杉山らの「行動分析学入門」(1998)の共著者ともなる Malott が Whaley と書いた *Elementary principles of behavior* (1971) である。その夏の宿題では、行動分析学のプログラム学習本である Holland & Skinner の *The analysis of behavior: A program for self-instruction* (1961) を、大学になって購入した Olivetti のタイプライターの練習も兼ねて英語で要約した覚えがある。日本語での教科書など、まだどこにもない時期で、浅野訳の Reynolds 著作「オペラント心理学入門—行動分析への道」(1978)の登場は5年後である。

その後の国内外での行動分析学の教科書の充実ぶりは知っての通りである。最近の私の授業では Mazur の著作の翻訳である「メイザーの学習と行動」を中心に、先の Reynolds の教科書と O'Donohue & Ferguson 著作の翻訳「スキナーの心理学—応用行動分析学(ABA)の誕生」(2005)を使ってきた。しかし今や、こうした翻訳に頼らずとも行動分析学を学ぶのにふさわしい教科書が、日本人によって次々生み出されている。

本書もそうした国産の行動分析学の教科書で

ある。著者の井上と坂上はそれぞれ応用と基礎の領域で仕事をしてきたが、この2領域の共同で書き上げたいというのが当初からの願いであった。また概念的哲学的な事柄と科学的実証的な事柄とをバランスよく整理し、1冊でもって行動分析学を俯瞰できるものになりたいという希望も持っていた。まったくもって身の丈のほどを知らない、欲深い不埒な構想といえる。しかし行動分析学という学問の特徴は、この2つの2極構造にあるともいえ、両者はこの構想の実現に一步でも近づこうと書き続けたのである。そしてその評価は読者に委ねられている。

鳥取と東京という離れた場所での分担執筆が何年も続けられたが、これを支えたのは有斐閣の3人の編集者の方々だった。井上の東京やその近県への出張に合わせて行われた二人の会合のほとんどに、編集者は付き合ってください、提示型の強化を中心に、反応形成、反応連鎖、フェイディング(溶化)、プロンプトなど、行動分析学のあらゆる技法を巧みに私たちの執筆行動に適用して下さった。彼らのような優れた編集者に恵まれなければ、私たちは構想実現のための歩みを進めることはできなかったと思う。もしも本書の出来が良いものであるとすれば、そ

の功は彼らにある。逆に悪ければ、その非は私たちにある。

本書で最も力を入れたのは、随伴性と機能の考え方についての説明である。行動分析学の入門者が最も躓きやすいのが、この2つの概念の理解だからである。私たちは暗い時間トンネルの中で、「いま、ここ」という展翹板に止められ、次から次へと絶え間なく刺激や反応を経験している。ある時は刺激と刺激が、ある時は自分たちの反応に刺激が伴い、そうした経験を通して、環境世界の私たちへの効果に変化し、私たちの行動がもたらす環境世界への効果も変わっていく。そういう環境や刺激、行動や反応は、科学的に操作や観察はされても、物理的・化学的に記述される不変な何かではなく、個体と環境との関係の変化によって互いが相手にもたらす効果の性質を変えていく生物学的な実体として取り扱われる。このように書いてしまうと、いよいよ随伴性や機能という概念は秘儀めいたものになってしまうかもしれないが、本書ではできる限りわかりやすく、これらの概念を何度も繰り返

して説明しようとしてきた。成功しているかは不安ではあるが。

最後の「第8章 反応遮断化理論と選択行動——強化と価値を考える」と「第9章 言語行動と文化随伴性——行動分析学から展望する」の章は、多くの人にとって難解と思われるであろう。実はこの2章を書き上げるのに、私たちは1年をほぼ費やした。どんな著書でもそうであるが、初めと終わりが一番つらい。「こころ」を認める心理学を当然のように受け入れている読者をどのように説得することで行動分析学に入ってもらえるのか、行動分析学の入門的理解を果たした読者にこの学問の深さや展望をどう直感してもらえるのか、そして何より、私たちの進んでいこうとする道筋をはっきりと示していけるのか。すでに十分吟味された問題であっても、新しい光を当てることでまた異なった角度からの議論が可能になる。これらの章が、選択行動と言語行動についての、今なお果ての見えない荒野への小さな手掛かりとなっていれば幸せである。

編集後記

毎日のように最高気温を更新し、例年にない暑い年になっております。体調を崩されておられませんでしょうか。

本号は、学会に関連した記事として京都の拉麺案内、参加記として春の学校参加記やSQAB参加記、自著を語るでは「行動分析学 ― 行動の科学的理解をめざして」の紹介記事をご執筆いただきました。ご執筆、ご投稿いただきました先生方には厚く御礼申し上げます。

さて、本ニューズレターでは、ご自身の研究、関心領域に関する記事や、少し趣向の変わった記事など、様々な内容の記事を募集しております。引き続き、皆様からのご寄稿をお待ちしております。

暑い日もまだまだ続きそうですが、体調にお気を付けください。特に熱中症には十分にお気を付けください (KK)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

● ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

- ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトにて公開します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部心理学研究室

日本行動分析学会ニューズレター編集部

眞邊 一近

E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp